

別記様式第15号－1(第29第4項関係)(特別交付型)

令和4年度 消費・安全対策交付金(食料安全保障確立対策推進交付金)都道府県等成果及び評価報告書(令和5年8月作成)
 (令和4年度消費・安全対策交付金 令和3年度補正予算繰越分)

都道府県等名:愛媛県

目的	目標	目標値及び実績			事業実施主体ごとの達成度			交付金相当額 (円) (うち地域提案メニュー)	備考
		目標値	実績	達成度	事業実施主体	目標	達成度		
Ⅱ 伝染性疾 病・病害 虫の発生 予防・ま ん延防止	病虫害の防除の推進 (特別交付型)	スクミリンゴガイの発生抑制	スクミリンゴガ イの発生抑制	達成	愛媛県	スクミリンゴガ イの発生抑制	達成	101,856	
総計・総合達成度				総合達成度 達成 総合評価 適正				101,856	

国による評価の概要

総合達成度は「達成」であり、総合評価「適正」は妥当と判断する。なお、事業は適切に実施されたと評価する。

目標 病害虫の防除の推進					
事業実施期間 令和4年度			都道府県等名 愛媛県		
事業の実施方法					
<p>愛媛県伊予市、松前町及び砥部町は、集落営農による水稲栽培が盛んな地域であり、県内で唯一、種子生産も行うなど、本県の水稲生産にとって重要な拠点である。</p> <p>しかし近年、スクミリンゴガイによる食害が多発し、収量減少やコスト増加等、水稲栽培に多大な影響を及ぼしている。当地域では、麦との二毛作栽培が行われているが、この栽培体系では既存の防除対策として有効とされる冬季の作業（耕うん、石灰窒素等）が実施できない場合があり、また、種子生産ほ場では被害株の補植ができないといった問題もある。このため、管内の二毛作体系に適合した防除体系を確立させる必要がある。</p> <p>昨年度、当事業で実証試験を実施し、一定の成果があがったことから、今年度、効果と普及性や波及性を考慮した防除体系の確立と精度の安定化を目指す。</p> <p>地域の実情に応じて、①冬期の定期的な耕うん・水路の土あげ、②ほ場の均平化、③化学農薬散布（石灰窒素含む）、④田植え前の入水口へ侵入防止ネットの設置、⑤田植え直後の浅水管理の5手法を可能な範囲で組み合わせ、その効果を検証し、効果的な防除体系の確立を目指す。</p>					
目標値					
項目	現状	目標値	実績	達成度	評価
スクミリンゴガイの管理手法の確立	—	スクミリンゴガイの発生抑制	スクミリンゴガイの発生抑制	達成	適正
事業内容及び実績額					
事業内容	規格・規模等	所要額実績 (円)	左の交付金相当額 (円)	交付率 (%)	
(3)スクミリンゴガイの管理手法の確立	水稲16ほ場 2.4ha	203,712	101,856	50	

事業の成果

ア 対象作物名及び対象病害虫・雑草名
水稲、スクミリンゴガイ

イ 取り組んだ検定手法や防除技術等の内容

各種防除手法（①冬期の定期的な耕うん・水路の土あげ、②ほ場の均平化、③化学農薬散布（石灰窒素含む）、④田植え前の入水口へ侵入防止ネットの設置、⑤田植え直後の浅水管理を組み合わせた実証ほ場を設置し、その効果を検証した。

ウ 検定手法や防除技術等の実証ほ等の設置場所及び面積（a）

計 16 ほ場（2.4ha）

・伊予市尾崎地区	2 ほ場	対策①、②、③、⑤を実施
・伊予市稲荷地区	1 ほ場	対策①、②、③、④、⑤を実施
・伊予市中村地区	3 ほ場	対策②、③、④、⑤を実施
・伊予市上吾川地区	2 ほ場	対策①、②、③、④、⑤を実施
・松前町大溝地区	3 ほ場	対策②、③、④、⑤を実施
・松前町昌農内地区	3 ほ場	対策②、③、⑤を実施
・砥部町川井地区	2 ほ場	対策①、②、③、④、⑤を実施

オ 講習会、検討会等開催回数

研修会 4 回

カ 防除が困難な作物の防除体系等の効果把握のための調査手法

定期的な巡回や生産者等への聞き取り調査により、被害状況を把握し、各種防除対策の組み合わせの効果を確認した。

その結果、全てのほ場において昨年比で被害が減り、うち半数以上で5割以上被害が減少したことを確認した。

組み合わせでは、殺菌剤散布と田植え直後の徹底した浅水管理が最も有効であった。

キ 現行の発生状況調査又は病害虫防除の経費（10a 当たり、対象作物毎）

経費（円）：約 6 千円

内訳：化学農薬を 2 回散布

ク 新たな管理手法等を導入した発生状況調査又は病害虫防除の経費（10a 当たり、対象作物毎）

経費（円）：約 3 千円

内訳：化学農薬を 1 回散布し、代掻きや浅水管理を徹底する

ケ 見学会、広報等の取組

成果を取りまとめ、研修会や現地確認等を通じて生産者に周知した。

コ ほ場ごとの防除（作付前に取り組んだ防除対策も含む。）及び栽培管理の実施状況並びに作付、前期作及び今期作の病害虫の発生状況、気象等のほ場条件を踏まえた従来の防除対策では防除が困難な作物の防除体系等の効果の検証結果の概要（作物ごと）

令和 4 年度のスクリリンゴガイの発生量は、前年度に比べて全体的に少なかった。これは、前年度冬季の平均最低気温が低く推移したことにより、越冬貝が減少したことも要因と考えられる（松山市における最低気温の平均：R3 年 1 月＝2.6℃、R4 年 1 月＝2.1℃）。

発生量が少ない状況ではあったが、全ての実証ほ場で前年度（慣行栽培では、化学農薬 2 回散布による防除管理が多くみられる）より被害が減少し、さらに、その半数以上のほ場で前年比 50%以上の被害の減少が見られた。

各種防除手法の組み合わせについて、技術導入にかかる労力や経費等を総合的に判断すると、前年の実証試験同様に、殺菌剤散布とほ場の均平化・田植え直後の徹底した浅水管理を組み合わせ手法が最も有効であると再確認できた。

また、成果を取りまとめ、研修会等を通じて生産者に周知し、スクミリンゴガイ被害のまん延防止に向けた普及活動を展開したところ、前年以上に防除・対策意識の向上がみられた。

この 2 年間の取り組みにより、管内の水稲生産者の多くは、スクミリンゴガイは対策によって防ぐことができる、という感覚を持つようになってきたと感じている。近年の米価の下落と農薬等資材の高騰も相まって、1 剤 1 回でスクミリンゴガイ対策ができるように、技術格差の是正や更なる防除・対策意識の向上を図り、管内水田全体への波及を図る。

都道府県等による評価の概要

地域の実情に応じた防除体系の実証を行い、全てのほ場で被害を軽減することができた。また、併せてその成果を生産者に周知し、防除・対策意識の向上を図ることができた。

【専門家の意見】（愛媛大学 農学部 小西和彦教授）
病害虫の発生量は気象条件により大きく変動するので、引き続き実証試験を行う必要があると考える。

第三者の主なコメント

愛媛大学 農学部 教授 小西 和彦

耕種的防除と殺虫剤の組み合わせにより効率的な防除が行えることを生産者に普及できており、高く評価できる。

国による評価の概要

目標値のスクミリンゴガイの発生抑制は達成されており、地域の実情に応じた防除体系の効果がみられ、対策事業の執行は適切に行われたと評価する。